2024年01月30日（火）【外為Ｌａｂ】松田哲
タイトル：【2024年も１ヶ月経過】

今年（2024年）も始まってから１ヶ月が過ぎようとしている。

速いものだ、と感じている。

昨年（2023年）から、日本の金融政策の変更が意識されている。

これまでの大規模な金融緩和策を止めて、金融引き締めに向かうであろう、ということだ。

++

振り返ると、昨年の12月初旬（2023年12月7日）に、植田日銀総裁が参議院の財政金融委員会で、今後の金融政策運営について、
「年末から来年（2024年）にかけて一段とチャレンジングになる」
と述べた。

この時のマーケット（外国為替市場）は、日銀が金融政策の修正、すなわち、日銀が利上げに向かう、と判断し、その結果、ドル／円は急落した（＝ドル安円高が進行した）。

++

ところが、昨年12月（2023年12月18日、19日）の日銀金融政策決定会合では、特段の変更は示されなかった。

日銀は、昨年12月（2023年12月18日、19日）の金融政策決定会合で、従来の大規模な金融緩和策の維持を決定した。

++

そして、今月（2024年1月22日、23日）の日銀金融政策決定会合だが、この時も、従来の大規模な金融緩和策の維持を決定した。

つまり、マイナス金利政策を維持し、長短金利操作（イールドカーブ・コントロール）も従来のまま、上場投資信託（ＥＴＦ）買い入れも現状のままとした。

短期金利は、日銀当座預金の一部にマイナス0.1%のマイナス金利を適用する。

長期金利は 1%を上限の「めど」とする従来の政策に変更は無い。

++

昨年末（2023 年 12 月）から、今月（2024 年 1 月）に関しては、金融政策の変更は先送りされた、と言って良いのだろう。

++
++

ドル／円の相場を、振り返って俯瞰すると、昨年（2023 年）の夏（8 月ころ）から、現在（2024 年 1 月）に至る期間、おおよそ 140 円から 150 円（高値は 151 円台）のレンジに収まっている。

当面のところは、この相対的高値圏での上下動が維持されそうな状況といって良いのだろう。

それは、日銀の金融政策の変更が実施されなければ、といった条件が付帯する。

++
++

昨年 12 月に植田日銀総裁が示唆した通りに、日銀が、今後金融引き締めに向かうことは間違いのないところ、と考えます。

後は、そのタイミングと考えます。

日銀は、物価の上昇に対しての賃金の上昇を見ているのだろう、と考えます。

日銀の金融政策のスタンスがはっきりするまでは、上述の「おおよそ 140 円から 150 円（高値は 151 円台）のレンジ内」で、混沌とした上下動が繰り返されて、正直な感想を付け加えるならば、少々イライラする相場展開が続きそうだ、と考えています。

++
++

（2024 年 01 月 30 日東京時間 14：35 記述）